

中国

# 加藤嘉

「かとうよしかず」 北京大学大学院生

## 対日世論が悪化するなか 新たな学生交流を立ち上げた



1984年静岡県生まれ。現在、国費留学生として北京大学国際関係学院大学院に在籍。中国人民大学付属高校教師。中国メディアでコメンテーターを務める。英フィナンシャルタイムズ中国語版コラムニスト。香港系フェニックスニューメディアにおけるブログは開設後半年で1000万アクセスを突破。最新の単著に『**誰為師?**』（東方出版社）がある

写真提供：筆者（以下も同じ）

### SARSのために日本人は帰国。 中国語習得に専念できた

北京首都国際空港に降り立ったのは今から6年半前、2003年の春だった。中国語はまったくわからない。誰一人として知らない異国の世界。人民元は持ち合わせ

ていなかった。19歳の誕生日を目前に、人生をリセットさせようとした私。ゼロからの挑戦が始まった。当時、北京では南方の広州から発したSARS（重症急性呼吸器症候群）が流行っていた。中国語版インターネットのトップページで、

毎日感染者・死亡者数をチェックしていたの覚えている。在中国日本大使館は、在留邦人の安全と健康を保護する観点から「帰国指令」を出した。私はそれを無視した。戦略的判断だった。

中国語習得が最大の課題だった私にとって、「SARS」ごときで現場を離れるわけにはいかなかった。周りから日本人がいなくなってくれたおかげで「中国語」のみに全力投球することができた。私が所属していた北京大学でもSARS感染者が出たため、授業はほぼストップした。

人生初の状況下で、私は朝から晩まで、現地住民とのコミュニケーションに没頭した。移動・睡眠の際もラジオを耳に、中国語からひとときも離れなかった。当初はもがき、苦しんだが、徐々に「感覚」をつかみ始めた。私の中国留学：北京生活にとって、中国語は「最大の武器」となった。如何なるアクションを起す上においても、である。3カ月後、HSK（中国語能力試験）8級を取得し、翻訳の仕事始めた。1年後には、現地の進

学校の日本語教師に、その半年後同時通訳をするようになった。習得した中国語を応用するプロセスは楽しかった。私は「ステージ1」と総括する。翻訳は、私に中国の各種文献に触れる機会を与えてくれた。フォーラムや交渉の場を通じて、人脈を広げることができた。東京大学と北京大学の学生代表が相互訪問し、英語で交流する

留学期間中、自由で独立した立場を存分に生かし、大使館、企業、大学などあらゆる機関と提携しながら、日中交流イベントを企画・実行した。「ステージII」である。05年には、北京を含めた各地で反日デモが起り、日中交流もかなりの打撃を受けた。大学キャンパス内における日本文化祭など、交流イベントが相次いで延期・キャンセルされた。

私は、中国国内の対日世論が悪化しているからこそ、学生交流を盛り上げるべきだと考えていた。東京大学と北京大学の学生代表に、相互訪問・英語を通じて交流してもらおう「京論壇 (JING Forum)」が、私の「答え」だった。日中双方合

わせて、年間50人程度の少数制。歴史、アイデンティティ、メディア、安全保障、経済協力、環境問題など日中間に横たわり、国際的にも注目を集めるテーマを、現地視察、企業・省庁訪問、著名人による講義、延々と続くディスカッション、両国学生共演によるプレゼンテーションなどを通して解き明かしていった。

08年7月には『東京大学生×北京大学生、京論壇―次世代が語る日中の本音』（明石書店）を出版させていただいた。京論壇は毎年開催され、半永久的に続いていく。2009年度も4回目が見事に終了した。将来的に、日中関係を左右するネットワークが形成されることを、私は確信している。創始人のひとりとして、未永く見守っていくつもりだ。

**ホットな話題を現地で、現地の方と、現地の言葉で話し合う**

現在、中国内外のメディアで、コメントーター・コラムニストとして、年間100以上の取材を受け、月間約20本の文章を中国語で執筆している。ようやく「ステイ

ジⅢ」まで来られた。きっかけは、05年4月の反日デモだった。

4月9日22時30分、香港系フエニックステレビの生中継人気トーク番組で、キャスターから「加藤さん、反日デモが起こった責任は日中どちらにあると思う」と問われた。初めての本格的なテレビ出演。背筋が凍りついた。「ここは中国。中国の責任と言えば、強制帰国になるかもしれない。かといって日本の責任と言えば、売国奴と見なされ、お国に帰れなくなるかもしれない」。一瞬の間にいろいろ考えた。気持ちを入れ替え、少しだけ深呼吸して答えた。

「昨今において歴史認識問題は日中両国に跨る外交マターになっています。よって、関係改善には双方の絶え間ない努力が必要なのは言うまでもありません。一方通行の解決はありえないのです。ただ、私は日本国民として、歴史を直視する勇氣を持ちたいと考えますし、政府にもそうあってもらいたいと切に願っています」

08年5月の胡锦涛中国国家主席訪日の際には、中国国際放送（China



北京オリンピック開会式、閉幕式で芸術監督を務めた映画監督の張芸謀（チャン・イーモウ）氏と

ならない。私のような若造に、当初は想像すらできなかった数々の機会を与えてくれた「第二の祖国」に、心から感謝したい。

最後に、自分より若い人たちにエールを送りたい。私は伊豆の小さな町で生まれた。幼いころ、目に見える世界がすべてだと信じて疑わなかった。家庭の事情などで、それなりに苦しい思いもした。山梨県の高校に通っていたころ、「人生もうだめかな」と落ち込んだ。

Radio International)にて、北京大学国際関係学院における私の指導教官、朱鋒教授と共演で生中継解説する機会を得た。異国の地から祖国を眺める自分。不思議な空間に身を委ねる自分。緊張のなかに、心地よさがあつた。

反日デモ以外にも、日中首脳外交、毒ギョーザ事件、四川大地震、北京五輪、金融危機、建国60周年イベントなど、ホットな話題を現地で、現地の方と、現地の言葉でコミュニケーションを取ってきたことは、一生の財産にほか

けれども、野球はツアアウトから、ピンチはチャンス。思い切つて日本を飛び出した。日本の美しさを感じる事ができた。生まれて初めて、祖国を愛していると思えた。皆さんにも、そうあつてほしい。局面を開きできなくて、悩んでも、そこで終わってはいけない。どの国、どの地域でもいい。自ら考え、勇氣を持って異国へ飛び出すことで、日本が、そして自分が見えてくる。そのことにようやく気づいた。